

あの人・時代・風景をたどる「追憶散歩」

⑤正岡子規 最後の旅路

令和 5 年 (2023) 10 月 1 日発行

共同精版印刷株式会社 発行

本号「追憶散歩」には、松山市出身の正岡子規を取り上げました。「柿くへば〜」を生んだ奈良滞在 3 泊 4 日を追憶しました。子規の親友に旧制松山中学の英語教師に就いた夏目漱石がいます。漱石に書くことを勧めた子規は 1902 年逝去。創作活動はわずか 9 年。34 歳でした。

「編集余話」より引用

正岡子規 (1867~1902) は明治 28 年 (1895) 10 月 28 歳の時、故郷の愛媛県松山から東京へ向かう途中、奈良に 3 泊滞留。これが生涯最後の旅になりました。

1895 年、子規は新聞「日本」の記者として日清戦争を取材し帰国の船上で咯血しました。神戸と松山で療養した後、親友の夏目漱石から十円を借りて東京へ戻る旅の途上、10 月 26 日に奈良を訪ねました。

秋色の古都で奈良一流の旅館「對山楼」を拠点に奈良各所を巡りました。

對山楼では御所柿を堪能している。その時、釣鐘の音が聞こえどこの鐘かと聞くと東大寺の大釣鐘が初夜を打つのであるという。子規作「くだもの」より

このことより 2 週間後に

夏目漱石の「鐘つけば銀杏散るなり建長寺」への返句として「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」が歌われている。

對山楼の跡地は現在「日本料理天平俱樂部」になっており庭園一角は「子規の庭」として公開。

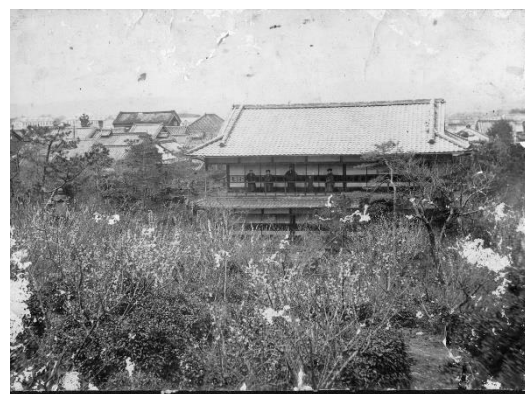
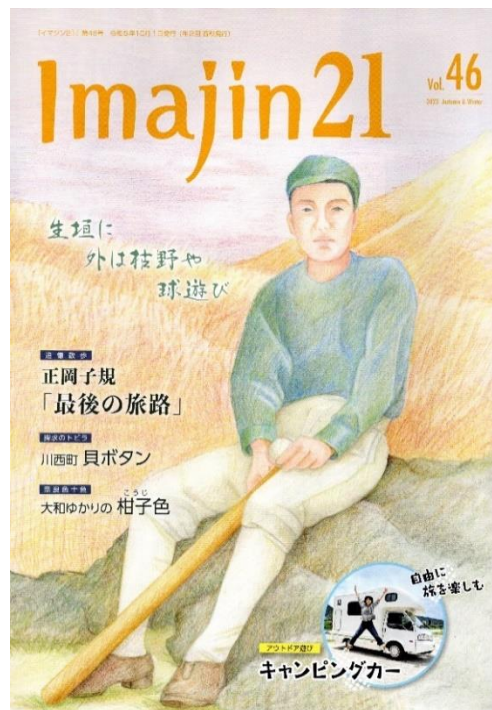
明治 20 年頃の對山楼の写真 (右)

對山楼全景 (上)

對山楼の庭 (下)

写真提供：天平俱樂部

掲載の写真は奈良県立図書情報館今昔 WEB より



對山楼全景



對山楼の庭